

## カトリック香里教会 年間第三主日 2022年1月23日

— ネヘミヤ8章・2-10、1コリント12章・12-30、ルカ1章・1-4、4・14-21 —

〔さて、〕イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。 -ルカ4章-

### 愛する霊を戴く

阪神大震災から27年。復興を目指した大阪教区が宣言したモットーは、元に戻す復興ではなく、福音を目指す生き方「新生計画」でした。その振り返りを、強烈に促すかのように追い打ちをかけて来た、長引くコロナウイルス禍に、人々は疲れを隠せないでいます。折しも、今日の典礼は、自らの不信仰がもたらしたバビロン捕囚から帰還したイスラエルの民が、過去の轍を踏まないための再出発に掲げたモットーは、『律法』を中心とすることでしたが、ここに又もや過去の轍を踏む盲点が潜んでいました。それは、選民主義と排他主義を生み、形式主義、狂信、祭司中心の独善性に陥る短所を宿して、イコジな民族となっていたのです。

宗教とは本来、個人の自発的な心に根差し、失われた個人を救い出す、愛と慈しみの精神を持つものであり、律法は、人を救う力、人に命を与える力を持っていません。神の霊が人に命を与え、これによって罪を避け、救いに至るのです。霊の力に満ちたイエスの到来は、この律法主義に置き去りにされた貧しい人々に、愛の福音を告げるためでした。

洗礼によって私たちは皆、キリストの体の一部を担う者にされます。キリストは、指令を体全体にいきわたらせる頭脳であり、私たちは、その指令を受けて、持ち場で使命を果たす肢体としての部分を受け持ちますが、その部分に優劣はありません。それは、“神は見劣りのする部分を一層引き立たせて体を組み立てられる”からです。神は、望みのままに種々の霊を一人一人に与えますが、私たちが戴く神の霊(カリスマ)の中で最高のものは「愛」です。洗礼を受けた私たちはこの「愛する霊」を受けているのです。自分のためではなく、全体の益のために。この「愛する霊」を戴いていることを自覚する人は、他を羨んだり、妬んだりしません。戴いた最高のカリスマを果たしていく喜びで心がいっぱいですから！

不思議な癒しの力、奇跡を起こす力、予言する力や、異言は戴いていなくても、最高のカリスマを戴いているのですから、他人の仕事を羨んでいる暇はありません！ 人の不幸を喜ぶ心と、人を赦し、受け入れて愛する心が受ける喜びは、天と地の開きがあるのです。それで愛する人の口には、いつもこの祈りがあります。

“神よ、この現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します！”

22年1月23日 主任司祭 昌川信雄

